

白山ふるさと文学賞

第九回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 優秀賞

シユート

明光小学校六年
高地 たかち
響生 ひびき

もう一本入れれば逆転。

俺は、力いっぱいボールをかけた。ボールはゴールポストの横に当たり、後ろにそれた。

「チツ。」

その後、こぼれ球を拾った相手チームが、俺たちのゴールを破った。ピツピツピー。審判の笛が鳴り、二対三で俺たちは負けた。

「クツソ。何で負けたんだよ。途中まで、勝てそうだったのに。」

次の朝、学校に行っても俺はまだひきずっていた。

「おい。」

重い頭を上げると、諸角だった。最も嫌いなクラスメイトだ。

「お前、昨日のあのパス、止められるはずだろ。何で止められなかったんだよ。」

「お前に何が分かるんだよ。」

思わずカツとなつて教室を出た。喉が渴いているわけでもないのに水がぶがぶ飲んだ。ついでに顔も洗った。

放課後、俺はいつものようにみんなとサッカーの練習をしているとコーチに呼ばれた。

「お前をレギュラーから外して、鳥井をレギュラーに入れる。」

何が何だか分からなかった。そのまま俺は走って家に帰った。ただいまも言わず、ベッドに飛び込んだ。

「駿、靴をちゃんとそろえなさい。」

下からお母さんの声が聞こえた。でも俺は、うつぶせのまま寝てしまった。

次の日、学校へ行くと、また、あいつに声をかけられた。

「お前レギュラー外されたんだって？まあ、頑張れよ。」

皮肉まじりの顔で言われた俺は、ムツとして机に顔を伏せた。俺は練習に行かず家へ帰った。次の日も、その次の日も、練習には行かなかった。リビングでテレビを見てみると、お母さんが茶わんをふきながら聞いて

きた。

「最近、サッカーの練習行ってないの？」

「うるさい。」

俺は、ドアをバタンと閉めて自分の部屋に戻った。ベッドに寝転がりながら、あいつの顔が浮かんだ。

「お前、レギュラー外されたって聞いたけど、まあ、頑張れよー何も知らんくせに。ふと、机にある写真が目に入った。サッカーを始めたころの写真だ。あのころ、お父さんにおねだりし、サッカーボールを買ってもらい、うれしくてずっとボールを触っていた。」

「：もう一度頑張ってみるかな。」

部屋の隅に放つてあったユニフォームをかばんに詰め込んだ。

俺は、いつもより三十分早く起きて、ランニングをすることにした。

朝の日差しがまぶしかった。三日ぶりに練習に参加した。思った以上に体がなまついていてすぐ息が切れた。練習の帰り道、転がっているタイヤを見つけた。そうだ。いつかテレビで見たタイヤ引きをしよう。俺は、もう一度グラウンドに戻った。一周、二周、三周。一度ひいた汗が再び吹き出した。レギュラーになるという一心でタイヤを引っ張っていた。

その後、ひたすらシュート練習をした。勢いのあるシュートを、打ちたかった。俺は毎日、練習後にタイヤ引きとシュート練習五十本をすることにした。二カ月経ったある日俺は気づいた。週に一度の紅白戦で、俺は、どちらの足でも必ずシュートを決められるようになっていた。

その二カ月後、四チーム合同の練習試合でついに、練習を試す機会を得た。○対二。残り七分。味方の鳥井が相手とぶつかり負傷した。

「海京。お前、出る。」

「あつ、はい。」

戸惑いながらも俺は、思いっきり走ってピッチに立った。俺にパスが回ってきた。敵が立ちほだかった。抜き去ろうとしてスピードを上げてから、後ろにいる山崎にパスをした。そのまま走ってゴールポストに向かった。

山崎が、相手の隙間をぬって低いパスをくれた。

「今だ。」

こん身の一撃を放った。結局、ボールは狙ったところから少し右にそれ、ゴールキーパーの指にはじかれた。ピッピッピ。審判の笛がグラウンドに響き渡った。俺は負けたのになぜかすがすがしい気持ちだった。

「おはよ。」

何となく足取りが軽い。

「おはよ。」

つい、あいつにも声をかけた。

「おー。あつそういえば、昨日のシュートも狙いが定まっていなかったよねえ。」

うん？あーあれかあ。そつかあ。そうだよなあ。やっぱり狙いが定まっていなかったか。俺は家に帰ってすぐ板でのを作り、地面に立てた。なかなか中心に当たらない。距離を縮めてやってみた。やっぱり近いと当たるもんだなあ。

段々慣れてきたから、距離を離していった。

「ハアハアハアハア。」

気付くとずいぶん影が長くなっていた。

「あーもうこんな時間か。後十発で終わりにしよう。」

気持ちを改め、残り十発的を狙った。疲れた体に秋の風が心地よかった。ふと、顔を上げると、あいつがいた。

「その的、へったくそやなあ。倒れてばっかやん。」

「おめえならどんなのにする。」

俺はあいつに聞いてみたくなった。

「うーん。ネットに引っ掛ければいいんじゃないか。」

「あーそういうのがあったか。で、何でいつもそんなに知ってるの。」

「塾の帰りに、見えるからな。」

「へえー。」

だからアドバイスっぽいのを教えてくれたんだな。

「おい累。ちよつと来てくれ。」

「おっおー。」

俺はめがけて全力でつけた。ど真ん中に当たった。累は、

「まあまあじゃない。」

と言つてにこりと笑った。なんか、その一言がすごくうれしかった。二人でベンチに腰かけた。

「なあ累。おめえは俺の事どう思ってたんだ？」

「なんか：あほな奴。だけど嫌いじゃないな。」

「それつてどっちだよ。：ハハハハハハハハハ。」

「ハハハハハハハハハ。」

二人で顔を合わせて笑った。夕日が二人の頬を真っ赤に染めた。

